

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究（B）（一般）

研究期間：2009～2011

課題番号：21330133

研究課題名（和文） 犯罪者（特に、少年犯罪者）の社会復帰に関する理論的検討とアクションリサーチ

研究課題名（英文） Theoretical exploration of and action research on the reentry of offenders, especially juvenile offenders

研究代表者：

津 富 宏 (TSUTOMI HIROSHI)

静岡県立大学・国際関係学部・教授

研究者番号：50347382

研究成果の概要（和文）：

本研究の第一の成果は、長所基盤モデルに立った、犯罪者（特に、少年犯罪者）の社会復帰のありようについて、理論的な検討を深めたことである。その結果、専門書及び少年院出院者の手記の二冊の書籍を発刊し、さらに、鍵となる翻訳書が最終校正中である。第二の成果は、アクションリサーチを通じて、少年院出院者の相互支援団体が立ち上がり、運営上の経験を蓄積したことである。同団体の理事長は、非当事者である私から、当事者に間もなく移行し、真の当事者団体へと進化するところである。

研究成果の概要（英文）：

The first major outcome of this research project is the theoretical understanding of the process of reentry of offenders, especially juvenile offenders, based on the strength-based model. As a result, two books, a theoretical book for professionals and a book of collection of biographies of desisting juvenile delinquents have been published. Another book including the translation of a masterpiece on desistance is under final correction. The second major outcome is the establishment of a mutual-help group of ex-inmates of juvenile training schools through action research, which has grown organizationally. An ex-inmate is going to succeed me as a director of the group, which will help this group become truly self-help.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2010 年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2011 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
総 計	13,000,000	3,900,000	16,900,000

研究分野： 社会科学

科研費の分科・細目： 社会福祉学

キーワード： 学校・司法ソーシャルワーク

1. 研究開始当初の背景

犯罪者の社会復帰のモデルとしては、リスク管理モデルと、長所基盤モデルの二つが対比されることが多い（たとえば、Ward and Maruna, 2007）。現在、わが国では、犯罪統制への要求に応えるため、犯罪者をリスクと

して捉える、「リスク管理モデル」が主流となりつつある。

リスク管理モデルは、犯罪者の社会的排除を悪化させ、社会への再統合を妨げる危険性がある。ポジティブアプローチによる長所基盤モデルは、実務との乖離及びスティグマ

イゼーションという、リスク管理モデルの抱える二つの問題を解決できる可能性がある。

2. 研究の目的

1) 理論的検討：(リスク管理モデルと対比しつつ)長所基盤モデルに関する、文献の渉猟と検討を行い、長所基盤モデルの理論的意義を明らかとする。

2) アクションリサーチ：少年院の出院者ですでに立ち直った者によるグループを組織し、少年院の出院した直後の者に対する社会復帰支援を実践し、その過程を通じて、わが国における長所基盤モデルに基づく社会復帰支援の可能性と課題を明確化する。

3. 研究の方法

1. 理論的検討について

1) 研究会を、研究者、実務家、当事者に開かれた、意見交換の場とし、長所基盤モデルに基づく社会復帰支援を支える理論の妥当性と限界を確認する。

2) 長所基盤モデルの代表的著書である、Making Good (Maruna, 2001) の翻訳を行うため翻訳チームを立ち上げ、作業を進める。

3) 海外の研究者・実務家との協力を積極的に進め、生きた情報収集に努める。そのため、長所基盤モデルに基づく社会復帰支援の先進地である諸国への視察を、当事者・実務家とともに行う。

2. アクションリサーチについて

1) 少年院や更生保護の現場で、講演活動などの活動実績を積み重ねる。同時に、法務省当局との協力関係を構築する。

2) 少年院出院者の協力を得て、少年院出院者のネットワークを形成し、当事者を主体とする、長所基盤モデルに基づく社会復帰支援団体を発足させる。

3) 非当事者を中心に、当事者による活動のサポート体制を整え、社会的信用を確保する

4. 研究成果

1) 理論的検討について

長所基盤モデルに立った、犯罪者(特に、少年犯罪者)の社会復帰のありようについて、理論的な検討を深め、その結果、専門書及び少年院出院者の手記の二冊の書籍を発刊し、さらに、鍵となる翻訳書が最終校正中である。

第一は、『犯罪者の立ち直りと犯罪者処遇のパラダイムシフト』(図書②)である。同書は、長所基盤モデルに基づく犯罪者の社会復帰支援について、研究者および実務家が理論的に整理しつつ、実務へのインプリケーションを提示したもので、この分野の最初にまとまった書物となった。

第二は、『セカンドチャンス！人生が変わった少年院出院者たち』である。同書は、少

年院出院者による少年院出院後の過程を描いた手記集で、わが国で初めての、少年院出院後の非行からの離脱過程の貴重な事例集となっている。また、同書は、アクションリサーチを通じて立ちあがった、社会復帰支援団体「セカンドチャンス！」の設立についても記述しており、このような実践団体の発足過程の記録ともなっている。

第三は、イギリス・リバプールの犯罪者の犯罪からの離脱過程を描いた、Making Good の翻訳であり、現在、最終校正中である。同書は、2002年にアメリカ犯罪学会賞と獲得した、犯罪者の離脱研究の古典ともいべき著作で、本邦での出版が待たれている。なお、原著者の Shadd Maruna 氏は、本研究の過程で一度来日していただき、その後、現地に訪問して意見交換を行った。

2) アクションリサーチについて

本研究を通じて、少年院出院者の全国サポートネットワーク「セカンドチャンス！」が立ち上がり、2010年にNPO法人化した。年3回の例会の実施、全国各地の少年院での講演、交流会の実施などを通じて、運営経験を蓄積してきた。とりわけ、交流会については、現在、東京、大阪、福岡、名古屋、広島で開催されており、間もなく、横浜、仙台でも開始される予定であり、同団体の活動の中核となっている。

また、同団体の理事長は、当初、非当事者である私であったが、任意団体としての発足以降3年間を経て、間もなく、当事者に移行することとなっている。その過程では、薬物依存の分野においては、当事者団体の先輩格「ダルク」、スウェーデンの犯罪離脱者の自助組織 KRIS などの実践に多くを学び、同団体は、当事者自身がコントロールする、真の当事者団体へと成長しつつある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件) うち査読付論文計(3)件

① 津富宏、はじめに—犯罪者の立ち直りと犯罪者処遇のパラダイムシフト—、犯罪社会学研究、査読無、2009、34:4-6、DOI:なし

② 津富宏、犯罪者処遇のパラダイムシフト—長所基盤モデルに向けて—、犯罪社会学研究、査読無、2009、34:47-57、DOI:なし

③ 上田光明、尾山滋、津富宏、General Theory of Crime におけるセルフコントロールの尺度化—ボンド理論との整合性は確保できるか—、犯罪社会学研究、査読有、2009、34:116-133、DOI:なし

- ④ 津富宏、「エビデンス」の利用に関する検討～技術移転と追試過程を中心に～、日本評価研究、査読有、2010、10:43-51、DOI:なし
- ⑤ 後藤あや、有馬喜代子、佐々木瞳、津富宏、鈴木友理子、山崎幸子、川井巧、安村誠司、2010、カナダのNobody's Perfectを参考にした育児学級参加者の追跡：スクリーニングと長期支援のあり方について、保健師ジャーナル、査読有、2010、66(12)、1086-1094、DOI:なし
- ⑥ 小長井賀典、生島浩、国際犯罪学会第16回世界大会 日本更生保護協会・全国保護司連盟企画シンポジウムについて、更生保護、第63巻第1号、査読無、2011、29-34、DOI:なし
- ⑦ 小長井賀典、更生支援の視点から犯罪者処遇を考える－犯罪者の地域への再統合、法学新法、査読無、第117巻7・8号、2011、297-328、DOI:なし
- ⑧ 小長井賀典、地域に根差した犯罪者処遇－犯罪者を地域福祉に繋ぐ、犯罪と非行、171号、査読無、2012、30-44、DOI:なし
- ⑨ 小長井賀典、《コミュニティ福祉学部公開セミナー開催報告》「コミュニティにおける犯罪リスク管理と元犯罪者の再統合」、立教大学コミュニティ福祉学部紀要、第14号、査読無、2012、155～161、DOI:なし
- ⑩ 小長井賀典、保護司の参加による犯罪者の立ち直り支援と犯罪予防活動シンポジウムについて、国際犯罪学会第16回世界大会報告書、査読無、2012、101、DOI:なし

[学会発表] (計11件) うち招待講演計(1)件

- ① Mitsuaki Ueda, Hiroshi Tsutomi, and Shigeru Oyama, Hirschi's Back with a New Scale of Self-Control: a Comparative Study of Two Scales of Self-Control. Stockholm Criminology Symposium. 2009. City Conference Centre.
- ② 小長井賀典、社会で取り組む少年犯罪の予防－我が組の取り組みの評価、警察政策フォーラム、2010、グランドアーク半蔵門ホテル
- ③ Mitsuaki Ueda, and Hiroshi Tsutomi, A Test of self-control theory among Japanese and Korean adolescents using the Hirschi (2004)'s bond based self-control scale: A proposal of a new method of theory testing in criminology. Stockholm Criminology Symposium, 2010, City Conference Centre.
- ④ 津富宏、上田光明、犯罪理論の「前提

をテストする：セルフコントロールセオリーの適用性に対するコンテキストの影響 日本犯罪社会学会大会、2010、国士舘大学

- ⑤ 津富宏・黒川潤、トランスレーショナル研究・実施研究の現状と、日本における取組み可能性～矯正保護領域を中心に～ 日本評価学会、2010、関西学院大学
- ⑥ 上田光明、津富宏、新しい視点からの犯罪不安規定要因の検討、日本犯罪社会学会大会、2011、立命館大学
- ⑦ Mitsuaki Ueda, and Mitsuaki Ueda, and Hiroshi Tsutomi, Determinants of Fear of Crime in Japan. Stockholm Criminology Symposium, 2011, City Conference Centre.
- ⑧ Hiroshi Tsutomi, A Time-Series Analysis of Determinants of Fear of Crime, the 16th World Congress of Criminology of the International Society of Criminology, 2011, Kobe International Conference Center.
- ⑨ Hiroshi Tsutomi, Laura Bui, and Mitsuaki Ueda, The Application of Power-Control Theory to Japan, The 16th World Congress of Criminology of the International Society of Criminology, 2011, Kobe International Conference Center
- ⑩ Kayo Konagai, Supporting Sex Offenders in the Community: A Japanese Perspective Encouraging Reintegration, The 16th World Congress of Criminology, 2011, Kobe International Conference Center
- ⑪ Kayo Konagai, Kenji Yamada, Tadahiro Honda, Eiji Tamura, Kanji Sumitani, Atsuko Hashima, and Helmut Kury, Rehabilitation Support for Ex-Offenders and Crime Prevention Activities by Japanese Volunteer Probation Officers in International Perspective, The 16th World Congress of Criminology, 2011, Kobe International Conference Center

[図書] (計5件)

- ① 津富宏 (共著)、セカンドチャンス! 編、新科学出版社、セカンドチャンス! 人生が変わった少年院出院者たち、2010、302
- ② 日本犯罪社会学会 (編)、津富宏 (責任編集)、現代人文社、犯罪者の立ち直りと犯罪者処遇のパラダイムシフト、2011、182
- ③ 松本勝、小長井賀典ほか、更生保護入門第3版、成文堂、2012、238
- ④ 町野朔、小長井賀典ほか、刑法・刑事

- 政策と福祉、 尚学社、2011、533
- ⑤ 細井洋子、西村春夫、高橋則夫編、修復
的正義の今日、明日、成文堂、2010、317

6. 研究組織

(1) 研究代表者

津富宏 (HIROSHI TSUTOMI)

静岡県立大学・国際関係学部・教授

研究者番号：50347382

(2) 研究分担者

小長井賀與 (KONAGAI KAYO)

立教大学・コミュニティ福祉学部・准教授

研究者番号：50440194